



ヴァナキュラー文化研究会15周年記念講演会

ヴァナキュラーな儀礼と音楽 —ペルーのアンデス農村における実践—

Ritos y música vernáculos



鳥塚 あゆち



イルマ・オスノ



笹久保 伸

日時：2023年10月31日（火）16:20 – 18:30

会場：立命館大学衣笠キャンパス
創思館1階カンファレンスルーム

主催：立命館大学 国際言語文化研究所

本研究は2023年度科研費獲得推進プログラムの助成を受けたものです。

趣旨

ペルーのアンデス地方は、インカを含め、標高3千メートルを超える山岳地帯に独自の文明が栄えた場所である。現在そこに点在する農村では、11月1日には「諸聖人の日」というカトリックの祭日が祝われる。また原産のリヤマやアルパカ以外に、牛や馬、羊などの牧畜が行われている。それらはかつて征服者のスペイン人によってもたらされたものだが、今ではアンデスの人々の伝統の一部となっている。本講演会では、アンデス農村に住む人々の日々の営みの中にある儀礼と音楽の実践を通して、そのヴァナキュラー文化のあり方を考える。

司会

安保寛尚（立命館大学）

プログラム

16:20 - 趣旨説明

16:30 - アンデス先住民共同体における儀礼の伝統と変容

17:10 - 生活にまつわるアンデスの歌

【休憩】

18:00 - 座談会「アンデスのヴァナキュラー文化について」

18:30 終了予定



登壇者



鳥塚 あゆち
(青山学院大学)

専門は文化人類学、アンデス地域研究。2004年からペルー南部の牧民共同体でフィールドワークを開始。アンデス高地に暮らすリヤマ・アルパカ牧畜民社会の変容や、先住民の在来知の研究を進めている。おもな業績に、「アンデス高地における牧民の生活：リヤマ・アルパカ利用と日帰り放牧」『熱帯高地の世界：「高地文明」の発見にむけて』山本紀夫（編）ナカニシヤ出版、「人間・家畜・自然の関わり合いから生成される文化：アンデス高地で家畜とともに生きる人々から学ぶ」『「縁側」知の生成にむけて：多文化関係学という場の潜在力』多文化関係学会（編）明石書店などがある。



イルマ・オスノ
(Irma Osno 早稲田大学、
法政大学、アヤクーチョ
民衆音楽の歌手)

ペルー、アヤクーチョ地方ウアルカス村生まれ。12歳までケチュア語のみを話し、地元の伝統文化のなかで育つ。政府とゲリラ組織の武装対立の影響を受けて首都リマに移住後、大学で教員資格をとり、中学・高校でスペイン語教員をつとめる。同時にサン・マルコス大学で民族舞踊を学び、アヤクーチョ民族舞踊団メンバーとして活躍。現在はスペイン語講師、ミュージシャンとして活動中。これまでに笹久保伸との共作アルバム『アヤクーチョの雨』(2013)、ソロアルバム『タキ アヤクーチョ』(2016)、マリアナ・バラフ×里アンナとの共作アルバム『BRISA CON TRES AROMAS』(2021)をリリースした。



笹久保 伸（ギタリスト）

秩父出身。2004年から2008年までペルーでアンデス音楽の調査と演奏活動を行う。現代音楽とアンデス音楽を演奏するギタリストとして南米やヨーロッパで公演し、2010年代にはアートコレクティブ「秩父前衛派」を展開。秩父を独自に調査し、音楽、映画、写真、現代美術の作品の制作にあたる。作品は金沢21世紀美術館、瀬戸内国際芸術祭、山形国際ドキュメンタリー映画祭、市原湖畔美術館などで発表された。現在までに38作品の音楽アルバムをLP、CD、カセットテープなどでリリースしている。